

寛政元年『花供養』

底本・櫻井 校異・綿屋

翻刻担当・京都俳諧研究会

花供養

（表紙・原題簽）

(表紙見返し)

寛政元酉年三月十二日於南無庵興行

一枝を捧る花の供養かな

在すがごとき肩の陽炎

伽羅真那かいづれも辛き春満て

水戸口近く朝ひらき待

月しらみ額つめたき草の風

竿に掛たる露の狩衣

淋しさに土芋なんと焼ならべ

芦涯

闌更

葵

桃睡

其成

角蜂

江涯

垣破れたる猿曳の家

梨山

盗人の咄しさへなき君が代に

在貫

四日のあやめ匂ふ夜すがら

木鳴

下略

奉納句順任到来

明ぼのや花にのぼりて鳥諷ふ

伊賀

一応

夕嵐つらなる花をわたる哉

岷異

月は照れど只静也夜の花

五湖

宵しばし花をもてなす月夜哉

伊勢山田

奇峰

(一ウ)

そのまゝの気色や庭に散る桜

四辻や花見戻りの花分る

山道や花を目当のかい曲り

老も肩に花かざしけり七曲り

花の山去年の貝売見る日哉

鍋に酒たやさぬ花の主かな

花咲てしたしき山家童かな

つくねおと外にもなし山桜

花にうかれ酒に狂ふや浮世坊

、津 桂岐

白子 無曲

武本庄 一馬

房磯村 英

、 倭風

、 梅喜

、 坡君

大津 楚南

、 陀仏

暁や冷酒に酔ふ花のぬし

、

蘆江

見残さぬ心のうちや四方の花

、

井子

酔醒や睡にかゝる花の塵

江辻村

梅仙

下臥や花の雫の我をうつ

、 石部

亀淵

花長く楽しむ寺の台かな

、 ボダイ寺

鉄翁

ひとりひとり出て来る人や初桜

、 山上

鷺橋

夜桜や物凄きまで静なる

、 三宅

酔月

山住の花に構はぬいびき哉

、 勝部

周路

盛とて散とて花に狂ふ哉

、 高島

圃丈

川越て見るも色あり山桜

、 堅田

未角

もどかしや花にわたりの手ぐり舟

、

千羅

水漉に花びらたまる庵かな

、

一之

いやいなじ花に暮行此曇

、 駒井沢

柏由

飲うたふ酒興に花も諷ひけり

、

蘭居

奥の花思ひ入にはさはらざる

、 水口

潮花

かたはらの花荅がちに雨寒し

、

蜃州

花満て野山の月に更るかな

、

江舟

菰着ても花見る事はたがふまじ

、

翅英

滝壺や昼寝の杣にちる桜

上藤岡

言志

幾さくら見捨て峰の桜かな

、境町

専車

夜桜の只花がちに見ゆる哉

甲州

静夢

大名の忍びありきや江戸の花

若能登野

鬼雀

行春や花にきはづく我衣

、藤井

白布

花咲て人通りあり知恩院

、

千里

みやびなる児達多し花の下

、向笠

貫卮

盛上るやうに桜の咲にけり

、

吐雲

花の山鳥も獣なかりけり

遠州

白輅

花に身を売て守るも浮世哉

花いろ花いろ子を並べたる思ひ哉

はつと咲後したはる、桜かな

さくら哉色を山路の奥までも

桜咲て心我より行過ぬ

たまくしげ向ふかゝみや桜影

笑ひ出す聾の顔や花盛り

白雲や花に集る人の声

山桜枝に届かぬ小腕かな

、

越ツルガ

約我

五鼎

加金城

楽山

、

如流

、

松華

能登

夕遊

越城ヶ端

杜市

丹梶原

洞々

、そのべ

其袋

初花や海道よりは北に見え

、

はこふ

朝顔の夢はさめけり初ざくら

播あかし

鷺山

旅寝せしおかしも今の桜哉

、小野

君中

ちるはちるは夢かとおもふ花の陰

、

田履

さくらにも出しきる嵯峨の涼台

、

華桂

牛追に一里つれてよ山桜

淡路島

玉屑

板壁にそもちりそめつ山桜

芸ヒロシマ

東吹

夜の雨翌日はさくらのいかならん

、小方浦

六賀

翁桜木の尊像に

(四ウ)

其魂の刻めば見ゆる桜かな
 花の雲いつしか嵐吹おろす
 ちる花の風情に捨よ舞扇
 雨のはな花の哀を尽しけり
 ちる桜打込志賀の畑かな
 花の浪より来る蝶のあらし哉
 初花に見せたる山の表かな
 浮たつは嵐の山のさくら哉
 強力のを桜を出たる山路かな

備岡山

恋宇

備後

柿風

、

古声

、

牛琴

、

吏全

、

馬樹

長赤間関

薫里

筑前

一超

筑黒崎

笋里

(五才)

花の陰歌よむ女見付たり

龍花

花の中東へ通る聖かな

、

完

花の山我衣手に鳥の糞

、

牆山

なら坂や桜の中を狂女行

、

鶴二

花廿日浮世を出て眠る哉

、

碕松

老落の足もつゞきて桜狩

豊小倉

李三

曙や雲に乱るゝ花の色

肥前諫早

東律

鐘撞の僧酔せばや花の寺

サツマ

完尔

山彦に花は散けり旅の宿

、

齒柳

(五ウ)

牛の背迄花咲にけりよしの山
 切すかす山のはなれに桜かな
 黄昏の花折る細きかひな哉
 被見て犬の吼けり山ざくら
 虚無僧の三井寺諷ふ花見哉
 花の下に忘れし杖の主は誰
 合点のうへにまよふや山ざくら
 咲花にいとほで白し嵐山
 柴の戸や留主守やうに遅桜

、	、	、	、	、	、	、	、
桃水	雷扇	可翠	凡十	山父	巴孝	里山	保山
							雨麦

此山の名を覚えけり初桜

城南平川

玉慶

桜見に足元くらき戻り哉

、

芦雁

さくら散る日もちりぢりの麓哉

、

梅英

花守も見しりてけふは笑けり

、

衣翻

老僧もよろぼひ既に散桜

、

男山

斗流

花盛麓に女太夫かな

、

黄口

花散や唯しづかにて風もなし

、

宇治

松風

山かげや花に嘯く墓の面

ダイゴ

百哺

花に寝ん夜は白妙と暮にけり

洛

紫暁

けふ見るは翌日のおかしの桜かな

ちる花を引浪ひくやいづこ迄

暮たりな曇りしまゝの花の下

跡追ふて登るは誰そや花の山

咲つゝく花のなかばや堂の椽

花曇谷間の家のおぼつかな

酔ふせる上戸めでたや花の陰

しづしづと千種に置や花の雪

日当りの能枝ばかり初桜

曾陸亭

定雅

百池

嵐月

都雀

志諺

義童

介福

帰楽

夢友

(七才)

都辺や花に切たる筆の先

花に霞かすみぞ花の行ふ哉

うちつけに得ほめぬ花の盛哉

おそはれて桜おらるゝ夢を見し

寝にかえる鳥見てさりぬ花の下

ほろ酔で花ながめやる姿かな

よし麓くるゝとも桜盛かな

袖の香や童子つき添花戻り

幸におくれる足や花の道

、 女

之尺

紫蘭

蜻子

一峰

三朝

佳計

如風

鄙雀

三子

(七ウ)

さゝがにも心ありてや糸ざくら
見とれけり桜にものを言やうに
渋茶にもはなしそみける雨の花
寺の前行過したりさくら花

逃ぎまに花ぬす人が狂歌せり

誘はれて宵は桜の直宿哉

夜桜や君おどろける流星

東山西山かけて花の庵

此雨後や四方の桜の下見せむ

女

遊鶴

至幸

如北

都鴛

呂風

露才

蓮車

得終

把柳

尼

(八才)

咲たりや祇園林の犬ざくら

松丸

愛宕山にて

土黒に付て散行桜かな

渭川

狩くらし花にいねつゝ花の夢

月峰

花曇脂目のおこる日なりけり

蛙面

落花ふお藁畠清し朝桜

有庸

よし野にて

日最中は花より起る曇哉

在
他
邦

瓜坊

のら舟の花にあやうき渡り哉

眉山

(八ウ)

ちる花や手に稀なる酔狂ひ
或法師一重ざくらを好れけり
立よらん花のこちらを水走る

白黛
朝叟
車蓋

一座

花供養静まる心ありがたき
人絶て大路の桜散にけり
花は桜御出家がたは身持哉
柴の戸やさくらの中の花供養
雨よはき花のほとりの曇かな

十二ハ

江涯

越後

桃睡

僧

葵

能登

木鳴

在貫

(九才)

とはれてもしらぬ山なり桜花

カヅ

李三

花に来て心外なる供養かな

角蜂

桜木の像をつたえて花供養

其成

遠近の人折そえつ花供養

闌更

京三条御幸町西エ入ル

蕉門書林 菊舎太兵衛梓

(九ウ)

遅来

酔覚や花にうつろふ星の数

上総長吉町

汀鳧

天然の始は一重ざくら哉

、

土鴨

わけ行ばしらぬ里あり桜狩

、

潜鯉

花咲て日に日に心ひとつ哉

、

正翠

蝶ひとつ桜戸に入曇かな

、

似雪

山里の夕暮白きさくらかな

、
押日村

楽中

さくら狩日に来て月に戻りけり

、

青徐

夜桜や朧朧の片庵

、
中瀧村

瀧水

さく比を過てあたごの遅ざくら

花と詠めさくらとながめ日は暮ぬ

五六日桜にぬるゝ硯かな

花に嵐居士衣のたもとおすぼるゝ

拳ンうつや袂にちりし糸桜

人しらでながらふ花の命哉

紙すくやあらしもふかず花ぞ散

出嫌もうかれ出にけり花の昼

見歸りて翌も来る気や夕桜

江戸

、 華溪

、 春岐

イセ 万化

姫路 寒鴻

筑前 君花

梅人

蘇蝶

(十ウ)

(裏表紙見返し)

(裏表紙)